

小田原石垣山一夜城と早川石切り丁場を歩く

山岸弘明

小田原城



豊臣秀吉



徳川家康

徳川家康の官位昇進

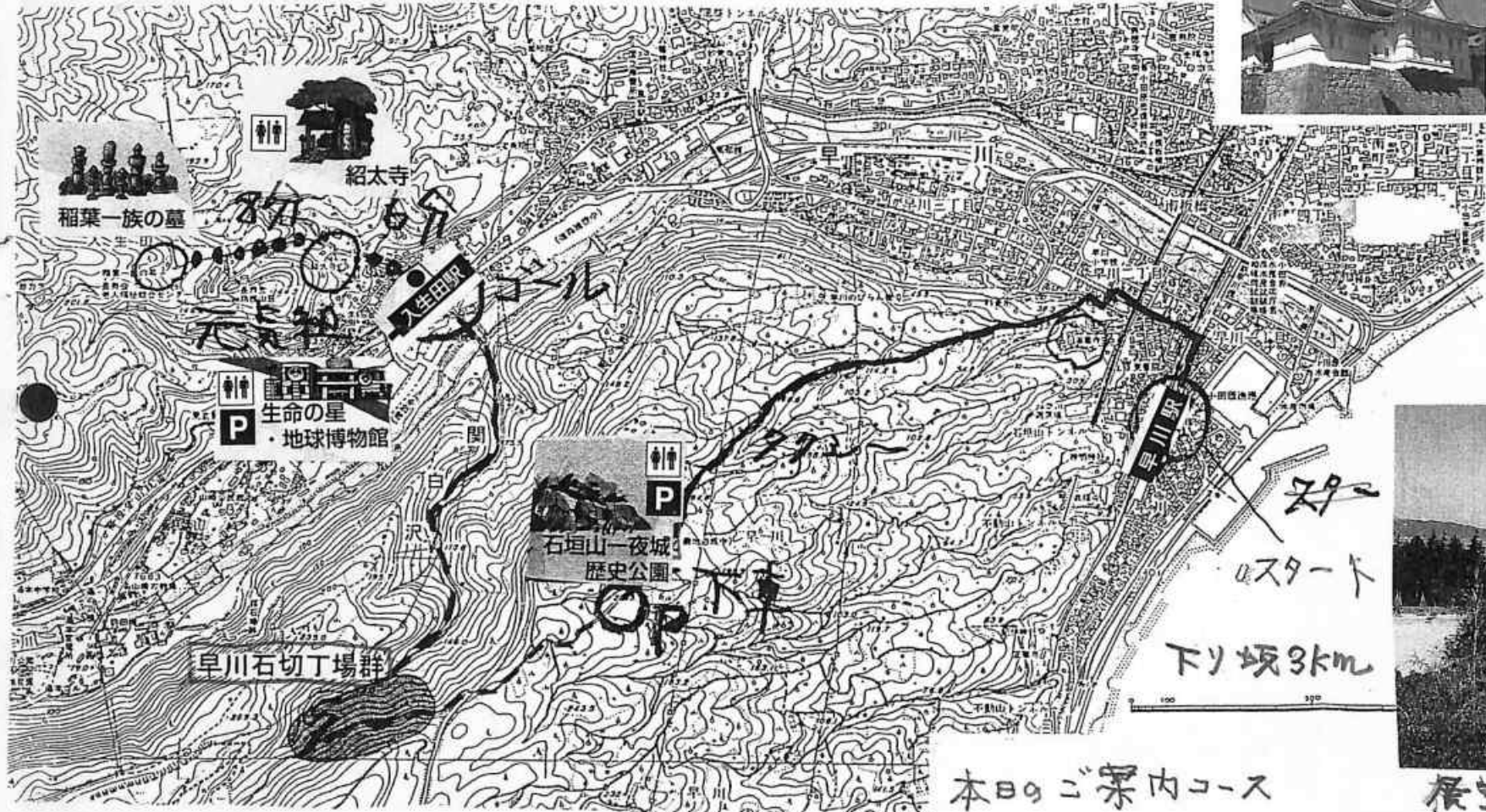
永禄9年	従五位下三河守
天正14年	正三位権中納言
15年	従二位権大納言
慶長3年	正二位内大臣

●長興山紹太寺

江戸時代の初期小田原藩主であった稲葉一族の菩提寺で宇治万福寺から紹かれた鉄牛和尚の開山です。初代、稲葉丹後守正勝は春日局の実子で、父の遺領、下野真岡を継ぎ、その後寛永9年小田原藩主となりました。正勝は着任後間もなく寛永11年(1634)死去し、2代美濃守正則は寛文9年(1669)に当時城下の山角町(現南町)に建立されていた菩提寺を生田の地に移転拡大し、長興山紹太寺と名付け、父母及び春日局の霊を弔いました。

●稲葉一族の墓所

稲葉一族の墓所には、五輪塔6基と角柱石塔婆1基が並んでいます。正面左から稲葉美濃守正則、稲葉丹後守正勝の正室、春日局、稲葉美濃守正則の正室、稲葉美濃守正則の長兄、そして少し離れたところに正勝の家臣・塚田木工助正家の墓があります。



展望台から小田原城を望む

本日のご案内コース

タクシー番号 22-1311, 0120-14-8512

空前の大物量作戦 小田原城攻略

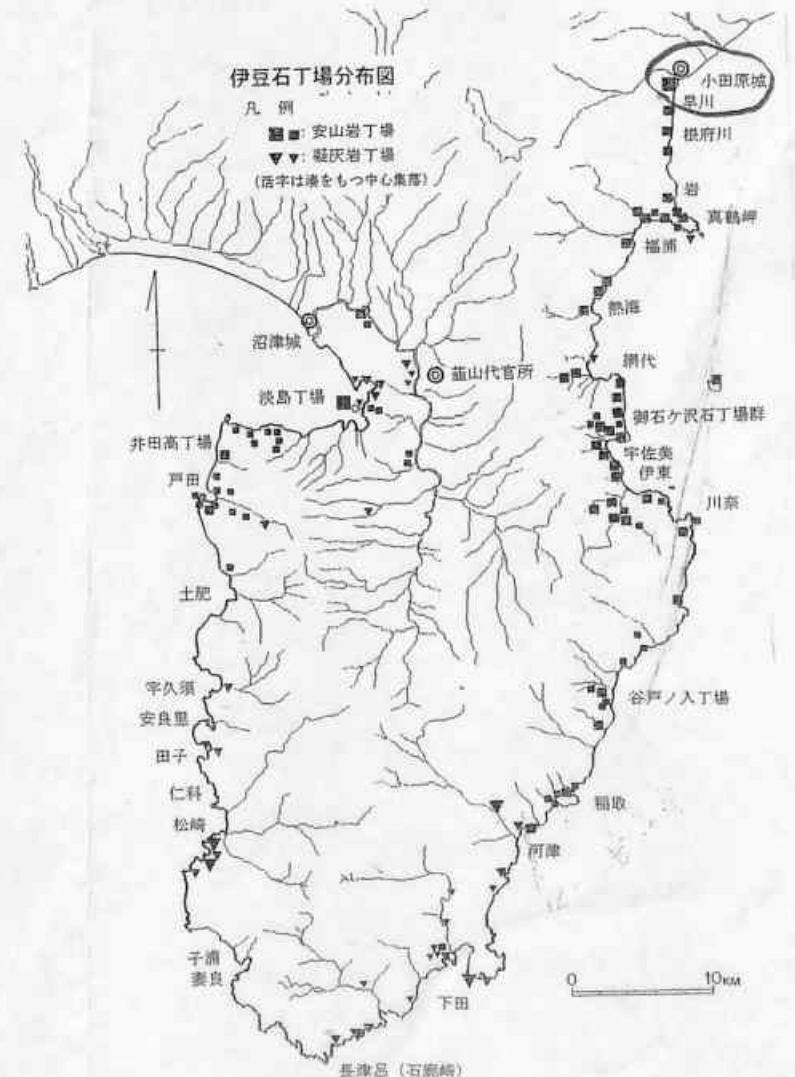


小田原攻めに際して、秀吉は徹底した物量作戦を断行し、長束正家を奉行に20万石の米を集めた。物資輸送のためには、九鬼嘉隆や長宗我部元親らに命じて大輸送船団を組織した。さらに都の守りを毛利輝元に任せ、進軍する関係諸国に対しては兵の宿泊施設を準備させた。こうして秀吉は、まさに総力をあげて小田原に集中させたのである。小田原城とその支城は、海から陸から、秀吉配下の21万の兵力によって、蟻のはい出るすきもない堅陣をもって完全に包囲された。

石垣山城 本丸石垣



石垣山城の本丸の井戸曲輪



伊豆半島の石切り丁場

小田原石垣山一夜城（後半）

1) 豊臣秀吉の「総無事令」と小田原城攻め — はじめに

- ① 私戦を禁じた「総無事令=すべて無事」で秀吉の全国制覇は目前。
 - (1)天正13年、天皇の名で戦争状況の戦国大名に対して大名同志の私戦をやめることを命令。
 - (2)天正15年、島津義久に対する九州攻め
- ② 未曾有の軍事作戦 — 小田原攻め総動員令
 - (1)天正16年、全国の諸大名を聚落第に集めて臣従を誓わせたが北条氏政は無視、自らの上洛に秀吉の母大政所の下向を要求したりもした。氏政は時代の趨勢を理解できず、滅亡への道を歩む。
 - (2)天正17年11月、諸大名に小田原出陣を命令。秀吉の真意は次の軍事目標であった「唐入り=朝鮮出兵」を想定した「予行演習」に過ぎなかった。
 - (3)秀吉は予め、西国から20万石におよぶ米穀などを水軍船で前線本拠の清水港に輸送、これまでの自弁方式を改めた大規模な食料補給体制をとった。

工期80日、人夫12万人

③ 急ピッチで進んだ石垣山一夜城 — 小田原城20万大包围網

- (1)天正18年2月1日先鋒徳川家康出陣、同月2~8陣出動
3月1日秀吉京都を進発
- (2)4月1日小田原城包围、20日松井田城、6月14日鉢形城、23日八王子城落城
- (3)石垣山一夜城は4月?築城開始、5月には石垣もほぼ完成したらしく、北政所に「いしく出来申し候、やがてひろま、てんしゅたて申すべく候」と書き送っている。
- (4)6月25日天守閣竣工。塀は紙を張って土壁にみせかけ、夜間に小田原城側の木を取り払ったので北条方からは一夜のうちに城が出現したようにみえた。
- (5)6月26日秀吉本陣を早雲寺から石垣山一夜城に移す。

④ 籠城3か月 — 戦うことなく敗れた戦国大名後北条氏の最後

- (1)長引く籠城で士気が低迷、秀吉や家康の「調略」戦法で寝返りも出る。親子兄弟間でも互いに疑い合う。一夜城の出現で完全に戦意喪失。
- (2)7月5日秀吉軍の総攻撃を前に北条氏政、氏直の親子が投降。
父氏政と重臣4人が切腹、家康の娘むこ氏直は助命、罪一等を減じられ高野山で出家したが、翌19年11月失意のうちに病死。歴代早雲以来5代の墓は早川やや上流の早雲寺にある。

2) 秀吉が愛人・淀君のために築いた西の丸（山里曲輪）

- ① 本丸で大森会長からバトンタッチ。本丸大手東虎口から1段下の西曲輪へ
- ② 立地を確認。右山側は本丸天守台、左は急崖で大堀切になる。本丸の西側を人工的に切岸した曲輪で、通称「西の丸」、山里曲輪とも。
- ③ 秀吉はここに側室・淀君を迎えるための御殿を築き、正室・大政所ねねにあてた書状で側室・淀の派遣を要請したという。秀吉らしい小まめさと憎らしいまでの図々しさが交錯する。
- ④ 山里曲輪の別名はこの地がまた、秀吉に随従した千利休が繰り返し開催した茶会に由来する。秀吉の小田原攻略は側室を同道、茶道を楽しむという「物見遊山」の余裕すら感じさせる。



北条氏直



北条氏政

淀君



秀吉の側室だった千利休の肖像(上)。秀吉所用の茶器を入れた旅籠箱(2点とも大坂城天守閣蔵)。

小田原攻めに随伴した茶頭・千利休(六九)の役は、秀吉を慰める茶会を催すことだった。伊豆国韭山へ出かけ、伐った竹で花入れを作り、「園城寺」と名付けたという。秀吉は豪華な陣屋を構えて側室の淀殿(二四)や松の丸殿を呼び、他の大名にもそうするよう勧めている。

陣中もまた京や堺の商人の出入りを許し、名物、珍物などが売られ、「京田舎の遊女は櫛を列ね軒を並べ、門前市をなして陣中一日も乏しいことがない」といったありさまを、徳川軍の榊原康政(四三)は、加藤清正(二九)宛に認めている。

利休が戦陣茶会を開く



石垣山城跡



←西の丸

→清正狩り場石



↑大手道 ↓コーナー部分



大手内↑謎の石垣↓



南曲輪天壇



3) 巨石ゴロゴロの廃道 — そびえ立つ石垣に囲まれた大手道を偲びながら下りる

- ① 大手門、升形跡
- ② 伝加藤清正の持ち場石=逆さだが「この石かき左右、加藤肥後守持ち場」と読む。石垣山城石積み持ち場、江戸城石切り持ち場など諸説。
- ③ 荒廃した大手道を注意深くゆっくり下がる。両側石垣の崩落した巨石が幾重にも重なる。自信ない方は2の丸を迂回。
- ④ アノウ衆を動員した「織豊時代」の当時最先端石積み技術と崩壊原因を実地検証。江戸城や大坂城など寛永ころの石組みと比較。石の形状がばらばら(間知石でない)、グリ石(水抜き)がない、勾配、直線積み、堅固なコーナーがない。根石は? などなど。工事の急ぎもあるが、当時の石積み技術に限界があったこともまた事実なのである。
- ④ 大手道に諸説。3の丸→井戸曲輪横→2の丸→本丸ルート説もある。
- ⑤ 大手道下の史跡看板できょうのコースを確認する。

4) みごとな南曲輪石垣と大堀切跡 — 発展途上の算木組も見どころ

- ① 当時の姿そのままの野づら積み高石垣が続く。石垣山でもっとも石垣遺構が残っている。
- ② コーナー部分に注目。角石はまだない、まだ完成しない発展途上の算木組みがある。
- ③ 大堀切=山を切り開いた巨大な堀切、小田原城の反対側でも手抜きはない。
- ④ 15分休憩。この後90分、ゴールまでトイレはありません。必ずすませましょう。

5) 出曲輪(外郭)を横目に関白道を10分ほどで早川石切り丁場へ

- ① 秀吉や淀君も歩いた関白道を西進、右側の小高い台地は出曲輪跡。いまは畑や雑林になっている。
- ② 下り坂になったあたりに十字路。右の小道は100mほどで断崖、本来は帯曲輪(武者走り)で本丸を迂回して2の丸に通じた。帯曲輪が崩落、通行禁止になっている。
- ③ 左側100mになぞの巨大石垣、新発見の一夜城外城か、はたまた後世のお遊びか、空堀も配した謎の石垣が取り残されたようにひっそりとたたずむ。
- ④ 周囲の紅葉に見とれながらさらに5分ほど歩くと「箱根パーンバイク」と交差、見下ろす景色がまたすばらしい。橋を渡ると道路工事現場。きょうの第2見学か所「早川石切り丁場」跡に到着する。

戦国時代の流通をめぐり、秀吉の御取りを牛んでから逆襲として種野をもった茶々、大坂の陣で敗れて自害したが、城も燃え尽かたため、その遺品もほとんど残っていない。(奈良国立博物館蔵)

早川石切り丁場群遺跡

1) 「石切り丁場」ってなに — はじめに

- ① 石切りは石材を山から切り出すこと、また加工することをいう。後に石切りは切り出し、石工は石積みと職種が分離することになる。丁場は受け持ち区分であわせて石切り工事作業場のこと。
- ② 関西では穴太(あのを)が有名、元比叡山のお抱え石工で、秀吉の石垣を担当、天下統一をはたすにおよんで「アノウ衆」が石工の代名詞となった。小田原北条氏や江戸幕府の徳川家は関東の青木氏を活用、アノウ衆=穴太の人ではない。
- ③ 一夜城では関西のあのを衆+人夫12万人が動員されたともいう。
- ④ 早川は江戸時代の石切り場だが一夜城の石材もここから切り出されたものと考えられている。
- ⑤ 「早川石切り丁場遺跡」は広域農道整備事業にともなって行われた発掘調査の27か所の遺跡総称で切り出しや加工途中の半製品、廃材、完成品などが累々と放置されている。これらはすべて今後の工事進捗で埋没、撤去、粉碎されることになる。最後の見学チャンスでもある。

2) 江戸城を築いた伊豆東海岸の石切り丁場群 — 55か所が確認された

- ① 江戸時代はじめ、江戸城の石材供給を命じられた諸大名は伊豆半島にそれぞれ石切り場を置いた。これまで1、2を除く大半は不明であったが近年の研究で55か所が確認された。
- ② 石切り場の最盛期は3代将軍・家光の寛永時代。しかし大名家では以後も拡張や修築に備え、いつでも再開できるよう「石場預かり」を置いて管理が続いた。
- ③ 早川を含めほぼすべての持ち場名は不明。残された刻印、符丁などで今後の解明が期待される。
- ④ 石切り場で規格寸法に仕上げられた製品やぐり石(かけら)は岩場の海岸に送り、いかだに載せ、両側に2隻の石船を付け、海水の浮力を利用して江戸へ運んだ。

3) 生々しい第1級資料の数々 — とくに勉強家のために

① 当代記(慶長9年=第1次江戸城工事)

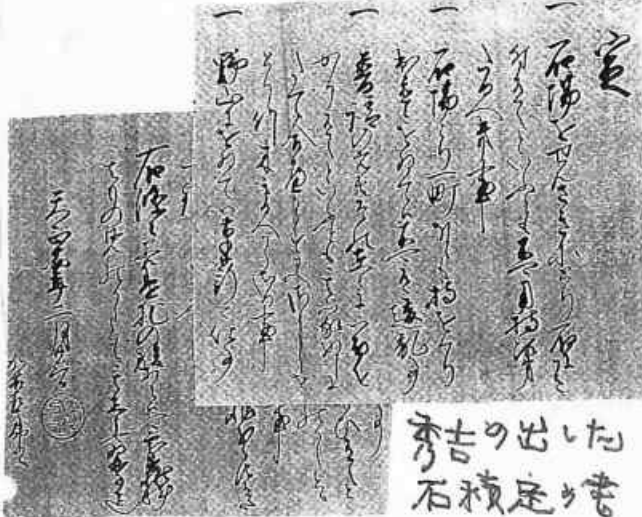
6月1日より武州江戸普請

一、慶長11年御城普請お手伝い仰せ付けられ、同年3月1日よりお普請始めこれあり、高10万石に付き100人持ち*の石1,120玉のつもりをもって差し出し候ように仰せ渡され、紀伊守(浅野幸長)より船数385隻差し出し申し候。右入用として公儀より金子1,092枚5両拝領仕り候。右相掛け、石船差し出し候面々、羽柴三左衛門=池田輝政、羽柴左衛門大夫=福島正則、加藤肥後守=清正、毛利藤七郎=秀就、ほか24名

*100人掛かりで運ぶ巨石。6~7トン



修築にはすり型、はしご型などいろいろある。巨大な石を帝釈天(たいしゃくてん)に踏みつけてにされる同修築から連想して、大石(たいしゃく)の下に敷いて使うので修築といったという説、シュラシュラと石を運ぶという説もある。上の写真はミツ原古墳から出土した修築。(大府教育委員会提供)



秀吉の出した石積足り書

巨石の輸送



1607年(慶長12年)徳川家康が駿府(すんぶ)城を築城したときの石を運ぶようす。修築とほほしきものが見られる。その下にコロになる丸水をおき並べ、綱で引く。力を入れ調子を合わせるためと綱につけ、石の上に乗った人々はさまざまな音を聞きながら。(「築城図解」より、朝日新聞)

あのを衆

② 慶長見聞集(慶長)

先年江戸お城石垣を付かせらるるによって伊豆国にて大石を大船に積むを見しに、海中へ石にて島を突き出し、水底深き岸に船を付け、陸と船との間に柱を打ち渡し、船を動かさず平地のごとく道を作り石をば台に乗せ、船の内にまき車を仕付けて綱を引き、陸にてテコ棒を持って石を押しやり船に乗する。船中にてまき車のたくみ奇特なり。

③ 当代記(慶長11年)

午5月25日の大風に伊豆国より江戸へ石運送の船数百隻破損。その内鍋島信濃守石船120隻、加藤左馬之助46隻(以下省略)

④ 黒田御用記(慶長11年)

荒切石の覚え

一、角石(かどいし)*12、長さ8尺より7尺の間、幅、厚さ3尺

一、角脇石*12、長さ5尺、7尺の内外、幅、厚さ3尺、幅は2尺5寸にても苦しからず

*角石はコーナーの算木組の角、角脇石は隣に置く石、江戸城では2つ石、2つ半石、完成度の高い大坂城には3つ石もある

4) 完成品の角石、矢穴を残す石、石引き道 — 石切り丁場跡をめぐる

- ① 農道工事現場と平行して走る遊歩道(一夜城石引き道?)をゆっくり歩きながら放置された石材を観察。途中危険少なそうな場所を選んで現場に下りる。
- ② 矢穴を残す石=矢と呼ばれるくさびを打ち込んで石を割った跡。石目を利用して矢穴を配置。
- ③ 石引き道=作業のため石を運んだ小路。
- ④ 「この左」と刻み、なぜか途中でやめた。
- ⑤ 残念石=輸送途中で放置された完成品の角石

5) 山を下り石船にのせる — 江戸城への遠い道のり

- ① 伊豆東海岸にはいたる所に石切り丁場が残るが、その多くは江戸城へと運ばれた。西海岸の石切り場は「天下普請」の駿府城など。一部は江戸城へも回送された。
- ② 製品は山を下り、岩場の海岸に運ばれ石船に載せて江戸へ運ばれたが早川の積み出し港は解明されていない。石船は3,000隻、石材価格は100人持ち銀20枚、ごろ太石1箱金3両であった。
- ③ いま江戸城址には黒石とやや赤み石、白石の3種が確認できる。黒石は早川などの安山岩(伊豆石)で切り出し当初は白、経日して黒くなった。やや赤み石も同じ伊豆安山岩で隣の根府川産だが、白石は遠く瀬戸内海の小豆島から運ばれている。
- ④ 小豆島の石切り丁場は国指定史跡に登録されたが、伊豆の石切り場は未指定。ほとんど解明されていないともいえる。地元機関や民間研究が期待される。

6) 時間あれば有志で紹太寺・稲葉一族の墓などをめぐる

以上



工事現場脇と進む



この左



丁場跡1石引き道↓早川

